

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2007 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 観光学	研究科 観光学	専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	観光学部教授	安島博幸 印	
自然・人文の別	自然 ・ 人文	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	近世後期の湯治場における滞在者の行動		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	観光学研究科博士課程前期課程	内田 彩 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2007	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

近年の日本では伝統的な療養・保養型温泉地への志向性が高まっており、今後は長期滞在が可能な、魅力ある温泉地を作る必要がある。

こうしたなか、近代以前の日本では温泉地の療養・保養を生かした長期滞在が可能な存在であり、長期滞在リゾートの原型であったと指摘されている本研究では、滞在者の行動から滞在生活を支えていた温泉地の仕組みを考察したうえで、長期滞在の「つれづれ」のなかで生まれた温泉地独特といえる滞在者の交流について、その発生と形態から明らかにする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[湯治場] [リゾート] [温泉地]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 研究背景と目的

近年の日本では、伝統的な療養・保養型温泉地への志向性が高まっており、今後は長期滞在が可能な、魅力ある温泉地を作る必要がある。こうしたなか、近代以前の温泉地は療養・保養を生かした長期滞在が可能な存在であり、長期滞在リゾートの原型であったと注目されているⁱⁱ⁾。また温泉が観光地の形成と発展に果たした役割も大きいことから、温泉地における長期滞在生活の仕組みを明らかにする必要がある。本研究では、「滞在生活」支えていた温泉地の仕組みを考察したうえで、長期滞在による日常の「つれづれ」のなかで生まれた温泉地独自といえる交流について、その発生と形態から明らかにする。

2. 研究の方法と手続き

温泉地の原型である近世後期の温泉地を対象として、湯治場における長期滞在の生活の実態を歴史的事象から分析を試みる。研究手続きは、近世後期の温泉番付で常に上位を占め、異なる個性をもつ有馬、草津、箱根、鳴子を主な研究対象地とした。対象史料としては、紀行文、日記、道中記等の文献史料、絵画史料を対象とした。

(1) 江戸時代の湯治

近世には、温泉集落の基本型が確立し、二廻りから三廻り(14~21日)り湯治が一つの形式として定着した。江戸時代中期以降の温泉医学の発達には、各藩が湯銭をとり、藩の財政を潤すために湯治場を保護した事と相まって、温泉地の発展を促したⁱⁱⁱ⁾。また、長期休暇が可能な階層の存在、藩による湯治の認知、医療手段としての温泉が位置づけられたことにより、温泉地の長期滞在を可能にし^{iv)}、『旅行用心集』に「上ハ王侯より下庶民に至る迄湯治すること今に盛也」と記述された。

(2) 江戸時代の温泉地滞在の構造

1) 宿の決定、日常生活、入浴

滞在生活は自炊であり、宿は鍋、釜、布団等も必要に応じ貸し出した。生活に必要な燃料や調味料は宿から購入できたが、食料品は露天や、宿廻りの行商からも購入できた。農民は、米や味噌等を持参して訪れており、各人に応じた生活が可能であった。宿主は、積極的に滞在生活をサポートしており、宿主の良し悪しが、宿の決定の重要事項になるなど滞在生活に影響を与えた。

入浴は基本的には共同湯が中心であった。共同湯の周辺には、有力湯宿、商店が立地しており、空間上の核であり湯治場のシンボルであった^{v)}。共同浴場への入浴は、生活の中心であり、同宿者と訪れたり、人々と出会える場であると同時に、人々の心性にとっても湯治場の中心であった。

2) 滞在行动

『伊香保紀行』では「土農工商ともに病ありて温泉に浴する事、二廻り三廻りの間は其業をやめ、世事の繁多なるを忘れ」とあり、自炊など日常的な要素に富みながらも、生業から離れた生活を過ごしており、全ての温泉地で、入湯、寺社参詣、遊楽の行動を取っていた^{vi)}。『有馬日記』では、23日の滞在生活中、21日間以上、寺社参詣、散策、酒宴、湯治仲間を訪問していた。また、温泉地には貸本屋、揚弓屋、茶屋等があり、体調に応じて各人が温泉地の生活を楽しんでいた。そのなかで散見されるのが「交流」である。

(3) 温泉地における交流の発生

1) 温泉地の交流

湯治場の特徴は、長期間にわたり同じ空間に見知らぬ人々が生活することがあげられる。湯治場の交流は「身も知らぬ者同士が、酒を酌み交わし、遊び戯れる様子を『有馬・但馬などの温泉場如し』(『西遊記』)」と温泉地独特と周知されていた^{vii)}。こうした交流は、体調の善し悪しや老若男女を問わず行えた滞在行动であった(『湯倉温泉紀行』)。

研究成果の概要 つづき

(2) 交流の発生

宿は、自炊であり調理などで朝夕顔をあわせるため、自然に交流ができたほか、他の宿の客が訪問するなどオープンなスペースになっていた。宿主も交流をスムーズにするために、湯治者同士の交流の仲介をする等、宿を交流空間として魅力ある施設にしていた。また、温泉地がヒューマンスケールで形成され、まち歩きしやすい環境にあった。まち歩きは、市場や土産物作りの見学などを気軽に行きやすくし、地元の人々と出会う機会を作り出していた。そして、寺社や周辺の自然環境は、休憩、宴、遊芸をおこなうスペースとして仲間同士で集えるほか、そこを起点として宿を越えて新しい仲間を得ることができた。

このように温泉地では、自然なかたちで自由に様々な人々が出会えた。そして、各人が交流をもつ複数の場所が存在し、遊びもかねた幅広い交流をもつことが可能であった。

4) 温泉地における交流の形態

(1) 交流の広がり

交流は、各人のもつ趣味や能力により、より深みをました。そして、能力を発揮する機会があれば、交流は広がり深みを見せた。各人の個性を生かした交流が可能であった。

(2) 出会いと別れの間

長期滞在生活は、「出会いと別れ」の間でもあった。たとえ親しくなっても必ず別れが訪れる。そして、別れを惜む人々とのセレモニーが存在した。また、最初は迎えられる側、慣れた湯治者として新しい人々を迎える側、そして去る人と別れを惜しみ、去るときは別れを惜しまれるという役割が常に回ってきた。こうした交流形態は長期滞在において単調になりがちな生活に起伏を与えた。

3) 情報の交流

温泉地は、長期滞在するため、情報を話す機会が多い一方で、情報を得る機会も多かった。いわば、情報の集積場であった。また、宿主等が情報の仲介点となり、客の話し相手になり情報を与える一方で、情報を発信する役割も果たしていた。話すことは、共通の趣味や芸事ができなくても誰でも可能な交流方法であった。そして、日に何度も人々が集い滞在する共同湯等での温泉入浴は、互いに話し合うことが行ないやすい環境であった。

このように温泉地には、長期にわたる時間を過ごすためには、行動的な活動のほかにも、知識的な活動を活発にさせることができる場があった。

4) 交流の結果

温泉地の交流は、温泉地だけで完結しなかった。温泉地で得た土産物が伝播だけでなく、人々の交流も続いた。温泉地を去っても、住所を交換し帰途にお互いに訪問するなど、交流は存続した。

こうした温泉地での多様な交流は、温泉地を再訪する要素の一つになった。

4. 結論

本論文では、近世後期の温泉地の滞在生活の一端を明らかにした。温泉地は、訪れる人々のニーズに応じて生活でき、滞在するなかで自然に交流を行なう仕組みが存在した。そして温泉地の交流は、滞在の魅力となると共に長期滞在生活をより豊かに起伏のあるものとしていたといえよう。

i) 武井裕之・渡辺貴介・安島博幸・天野光一(1989)：江戸・明治期における温泉地の長期滞在の構造に関する研究。都市計画論文集，24，385-390。

ii) 安島博幸(1989)：江戸から昭和初期の加賀温泉郷における湯治に関する研究。日本建築学会大会学術講演梗概集，149-150。

iii) 山村順次(2007)：日本における温泉地の発達と温泉地域社会の構築。地理，52，14-26。

iv) 武井裕之ほか全掲書。

v) 下村彰男(1993)：わが国における温泉地の空間構成に関する研究(1)－近世後期から明治にかけての温泉地の空間構成。東大農学部演習 林報告，90，3-95。

vi) 武井裕之ほか全掲書。

vii) 板坂耀子(1993)：江戸の旅と文学。ペリかん社，317p。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

なし

② 図書

なし

③ シンポジウムの開催

なし

④ その他

【修士論文】

2007年1月 修士論文「近世後期の温泉地における滞在と交流に関する研究」を提出

【受賞】

2007年12月 (財)アジア太平洋観光交流センターが公募する「第13回 観光に関する研究論文」において、「江戸時代後期の湯治場における交流」が奨励賞を受賞する。

【学会報告等】

2007年5月 日本観光研究学会ポスターセッションにて「近世後期の湯治場における滞在者の行動についての考察」を発表。

2007年12月 日本観光研究学会大会報告にて「近世後期の温泉地における長期滞在の生活スタイルに関する研究」を発表。

2008年3月 日本文化人類学会関東地区、修士論文報告会において「近世後期の温泉地における滞在と交流に関する研究」を発表